
蜃気楼と陽炎

エリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜃気楼と陽炎

【Nコード】

N4540P

【作者名】

エリカ

【あらすじ】

手を伸ばせば、簡単に捕まえられると思った。

…けれど、そんなことはなかった。

蜃気楼のように、陽炎のように。

アナタは捕まえようとすると、消えてしまう。

そんなアナタに恋をしてしまった私は、どうすればいい？

く出会いく

く出会いく

空には微かに星が見える。

街は色とりどりネオンに彩られ、艶やかに煌めいている。

《Star Storm》

そう書かれた看板の横に、星型のネオンが光っている。

明らかにそのお店は、高校生の私が入れるようなお店じゃないことぐらい分かっている。

キャバクラ、ホストクラブに、パブ。

それからラブホテルなんかこの通りにはある。

私はネオンで輝く、その通りの脇道に入る。

そこにはキャバクラやホストなんかのゴミ捨て場がある。

ここが私の定位置。ここに来はじめた頃、黒服のお兄さんや、キャバクラのお姉さん、ホストのお兄さんに声を掛けられていたけど、無視していたら、みんな私は無いものして、黙っていてくれるようになった。

たまに優しい自分が好きな人が、わざわざ警察なんか呼んでくれるけど、そんなやさしきなんか私はいない。

警察は「家に帰りなさい」と、言うけれど、あんな家には帰りたくない。

だから、ここにいるんだ。

ここから見える、一番輝いている星を見るのが好き。

一番輝いている星が金星だっけ？

あれが金星なのかな？あの一瞬輝いている星に触りたくて、真っ黒な空に手を伸ばしてみたけど、全然届かなかった。

届かないことくらい分かった。

分かったけど。

なんだか触れそうな気がしたんだ。

「お腹…空いたなあ…」

今、何時なのか分からないけど、一度家に戻ってみよう。

戻ってみて部屋に明かりが付いてたら、ここに帰ってこよう。

で、明かりが付いてなかったら、三日ぶりのお風呂に入って、コンビニでご飯を買おう。

よし、そうしよう。家のある、アパートの二階の右端を外から見てみると、明かりが煌々と付いていた。

あ、いる。

戻ろう、あの場所へ帰ろう。

はあ……、今日はいる日だったんだ。

これで四日もお風呂に入れてないや。

とあるブランドのショップのウィンドウに、今の私の姿が写る。

紺色の生地に白のラインの入ってリボンが赤のセーラー服に。

プリーツの多いスカートは膝上十センチまで折られている。

紺のソックスに茶色のローファア。

髪はパサついていて、纏まりがなくて、昨日もあのゴミ捨て場で寝たせいかな、目の下にクマが出来ていた。

ウィンドウ越しに飾ってあるマネキンは、私が一度も着たことのない、可愛くてフリフリの洋服を着ていた。

「いいなあ……私もマネキンになりたいや」

ぽつり呟いた言葉は街の喧騒と、排気ガスで汚れた空気の中に消えて行った。ゴミ捨て場に戻ってきた私は、膝を抱えてうずくまる。

「今日は寒いなあ」

冷える手足を摩りながら暖をとる。

まだマツチ売りの少女のぼうが いいよね。

あの子はマツチを持ってるんだもん。

私は何にも持っていない。

明日には私も、あの子みたいに死んじゃってたりしたら、どうしよう。

人様に迷惑掛けちゃダメなんだから、私は。

逝くときはこんな見つかりやすい場所じゃなくて、樹海みたいなところで死なないと。

じゃなきゃ、怒られる。

だんだん瞼の重たくなった私は、それに逆らわず、そのまま眠りに落ちた。

夢の中の私は幸せそうだった。

暖かい暖炉の前で、優しい家族と一緒に、美味しそうなご飯をお腹いっぱい食べていた。

そしていよいよ猫足バスタブの泡あわのお風呂に入るってときに、私は肩を揺すられ、目が覚めた。

肩をぐらんぐらん揺すられ、私の少ない脳みそも揺れているようだった。

「おいっ、大丈夫か？　おいっ」

「だ、大丈夫っ、大丈夫だから」

ぐらんぐらん揺すられながら、私は舌を切らないように気をつけながら声を発した。

すると私を揺すっていた黒服のお兄さんは、そばに置いていた《MIRAGE》とマジックペンが何かで書かれた袋を、私の後ろに同じように《MIRAGE》と指定されたゴミ捨て場に捨てた。

『死んでんのかと思っただけ』

そう呟いた黒服のお兄さんは、私に視線を合わすようにしゃがんだ。

「お前、学校は？」

学校？　ああ、そんなものに行ってたこともあったっけ。

その事に関して、お兄さんに言う必要性が見つからなかった私は、うんともすんとも返事をせずに、ただじーっとお兄さんを見ていた。

「口があるんだから、喋れよ。　飯食うとか、そんなことの前に、

意志疎通をはかるために口があるんだろうが」

じゃあ、お兄さんに話をしたら学校に行かせてくれるの？

お兄さんに話をしたら、お母さんは優しくなってくれるの？

…お兄さんの力じゃ出来ないでしょ。

だから、お願いだから、そっとしておいて。

私は今までお兄さんと合わせていた視線を膝に向けて、頭を埋めた。

そして、また眠ろうとした。

眠ろうと思って目を閉じたのに、黒服のお兄さんに髪を捕まれて、上を向かされたから目を開けた。

お兄さんは何か言いたそうな顔で、私を見るから黙ってじっとお兄さんの顔を見た。

「お前、家出少女か？」

私は家に帰らないけど、家出をしてるわけじゃない。

だから首を横に振った。

「じゃあ、何でこんなところにいるんだ」

お兄さんは、鍵が幾重にも掛けている私の心に、土足でスカスカと入り込んでくる。

それに堪らなくムカついて、とうとう私は口を開いた。

「お兄さんには関係ないよ。私に構ってないで、仕事に戻ったほうがいいと思うよ」

お兄さんは一瞬、目を見開いて、それから小さく息を吐いて。

「きちんと学校には行けよ。勉強はしておいたほうがいい」

一丁前なことを言うお兄さんは、私の頭をくしゃくしゃっとして、「じゃあな」と言っていなくなった。

私の頭をくしゃくしゃっとした時のお兄さんの表情が、太陽のように暖かくて、優しかった。

だから、冷たく当たったことを少し後悔した。

…でも、お兄さんも悪いんだもん。

私の突かれたくない部分を、針みたいに尖ったもので刺してくるから。

だから胸がズキズキして、喋りたなくなるんだ。

月がすっかり姿を隠して、太陽が存在を主張し始めるこの時間に、ここにいとサラリーマンだとか学生が好奇心な目で見てくるから嫌だ。

一旦、家を見に行こう。

フラフラと立ち上がって家へ向かう。

ここ二日くらいちゃんとした食事をしていないからか、体が宙に浮いたみたいにフワフワする。

まるで無重力みたいだ。

そんなフワフワする足取りで、家に明かりが付いているか見てみると、昨日は付いていた明かりが消えていた。

あ、いないみたいだ。

やっとお風呂に入れるっ。

ご飯も食べられる、服も着替えられる。

築二十年以上は経っているであろうアパートの階段を、私は駆け足で昇る。

階段はギイギイと音をたてたけれど気にしない。

普段から家には鍵がかかっていないから、私はそのままドアノブを捻った。

久しぶりに見る家の中は、さほど変わっていなかった。

ただ、変わっていたのは、お母さんの再婚相手の子ども——私からすれば弟の荷物が増えていたことだった。

私の荷物は押し入れの隅に置かれていた。

私はその荷物を漁って、下着と着替えの服を取り出して、お風呂へと向かう。

烏の行水のように、素早く全身を洗った。

綺麗になった体を拭いて、用意していた着替えに着替えた。

それから濡れた髪はドライヤーを使って乾かした。

今まで着ていた高校の制服は、どうすればいいか分からなくてそのままにした。

それから私は、押し入れの隅に置かれていた私の荷物を、大きな旅行バッグへ詰めた。

生きていくのに必要なお金も、私の分として置いてあったのを、あ
るだけ財布に入れた。

大きな旅行バッグに財布を入れて、それを背負って、私は靴を履い
た。

もうここには帰って来ない。

自分一人で生きようと思えば、生きれる年になったんだ。

ずっとこの日を待ってた。

今までありがとう、お母さん。

さようなら。

部屋に向かって深くお辞儀をしてから、ドアノブを回した。

するとドアが勝手に開いた。

あつ、誰か帰ってきちゃったつ。

ドアが開いた先に立っていたのは、一度だけ会ったことのある弟とお母さんの再婚相手——つまり、お父さんだった。

「もしかして、光花（みつか）ちゃんか？」

先に口を開いたのは、お父さんだった。

それに続くように弟も口を開く。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんなの？」

これ以上ここにいたらお母さんに怒られちゃう。

早く、早く家を出なくちゃ。

私はお父さんと弟から逃げるように家を出て、階段を駆け降りた。

後ろからお父さんと弟が何か言っているけど、気にしない。

早くあそこへ戻ろう。

私の定位置に戻ろう。

私はその一心で足を進める。

世の中で一番嫌いな好奇心な瞳も今は気にならない、
気にしていられなかった。

く大人の力く

く大人の力く

私は、ドサリと音をたてて置いた旅行バッグの隣に、座り込む。

久しぶりに走ったせいか、ハアハアと息が上がった。

息が上がったまま見上げた空はオレンジと水色が合わさった、変な色をしていた。

ここは安全だ、もう大丈夫。

自分にそう言い聞かせて、呼吸を整える。

…危なかった、本当に危なかった。

あそこで、もしお母さんが立っていたら…。

そう想像しただけで、背筋に嫌な汗が流れた。

「もしかして…ミツ？ ミツなのか？」

私をミツなんて呼ぶのは、この世で一人しかいなくて。

今生一切逢うことはないと思っていた人物だ。

「カズ…」

カズ——船木和也（ふなき かずや）は、唯一私の幼少時代を知っている友達だ。

「お前、こんなところで何やってるんだよ？ それにその鞆…もしかして…」

昔からカズは、勘が良かった。

だから、多分、今もカズは私の状況を見て、私が家から逃げてきたを分かったんだ。

「だったら家に来いよ。母ちゃんたちも、ミツに会いてえってよく言ってるし」

私もおばさんやおじさん、それからカズの弟の和馬（かずま）くんにも会いたくなって思う。

だってカズの家は暖かくて、ポカポカしてて、みんな優しいし。

だから、帰るのが少し寂しいって思う。

けど、カズの家に行くと、自分の家が普通ではなくて、異質なモノだと気付いてしまうから、…行きたくない。

「…ごめんね、カズ。おばさんやおじさんたちに、私は元気だよって伝えてくれるだけでいいから」

カズ、カズの優しさに甘えられなくてごめん。

本当にごめん。

そして、こんな私にいつも優しくしてくれてありがとう。

「お前、家に来ないならどうすんだよ。行くあてなんてねえだろ？」

「私にだって行くあてくらいあるよ。今、ここにいるのだって、時間潰しだし。行くあてはちゃんとあるから、心配しないで。じゃあね、バイバイ、カズ」

苦虫を潰したような顔をしているカズを追いつ出すように、その背中を押した。

もう二度とカズが、私に会いませんように。

私に会って、カズが余計な心配をしませんように。

カズとその家族が、いつまでも幸福でありますように……。カズをゴミ捨て場から追いやってから、私は一番輝いているあの星にずっと祈っていた。

目を綴じて、両手をきつく合わせて。

すると、いつの間にか、辺りは真っ暗になっていた。

お腹が空いたけど、立つ気力が湧いて来ない。

だから、一眠りしようと思った。

疲れたとき、人は眠れば元気になれるって、どこかの誰かが言っていた気がしたから。

今日は色々なことがあつて疲れた。

いつもよりも、グスリと眠れる気がしたのに、またしても黒服のお兄さんに邪魔をされた。

「もしかして、お前、朝の…？」

お兄さんは《MIRAGE》と書かれた袋片手に現れた。黒服のお兄さんは訝しげな表情を浮かべて私を見る。

「お前、学校は行ったのか？」

学校なんてモノには行っていないから、素直に首を横に振った。

「馬鹿か、あれほど人が言っただけなのに。行かずに何処にいたんだ？　もしかして、あれからずっとここにいたのか？」

一旦、家に帰ったから、ずっとじゃない。

だから、また首を横に振った。

「そうか。家に帰ったのか…ってお前、それは何だよ？」

お兄さんは少し怒り気味に、私の後ろに置いてある旅行バッグを指差しながら言った。

もう口で答えるしか出来ない質問をされてしまったから、仕方なく口を開いた。

「カバンだよ、カバン。そんなのもお兄さんってば、分らないの？」

私でさえも分かるのに。

そう言いかかった言葉を止めたのは、明らかに黒服のお兄さんが眉間にシワを寄せて怒ってるのが分かったから。

その時のお兄さんの顔は、私を見たときのお母さんと顔と一緒にだった。

私は叩かれると思って、顔を庇うように両腕が顔を守るように身構えた。

するとお兄さんは、その私の行動に驚いたのか一瞬目を見開いてから、私の頭をポンポンと叩いて「ゴメン」と言った。

お兄さんに謝られるとは思わなくて、私は伏せていた顔を思わず上げた。

「何でお兄さんが謝るの？ お兄さんは謝る必要ないじゃない」
黒服のお兄さんは、もう一度「ゴメン」と言う優しく私を抱きしめた。

こんなことお母さんにもされたことがないから、私はどうしていいか分からなくて手をぶらんぶらんさせていた。

いつまでも私の体を離さないお兄さんを、私は不思議に思つて声をかけた。

「お兄さん？どうしたの？」

「…お前、そのカバンの中身は何だ？」

質問に質問で返された私は、少しムスツとしながら答えた。

「家にあつた私の荷物全部」

こう会話をしている間も、お兄さんは私を抱きしめたままだ。

そろそろ放してほしいなつて思う。

だって、お兄さんがぎゅって抱きしめてくるから、苦しくなつてきたんだもん。

私がそんなことを思っているのを知らない黒服のお兄さんは、力強く私を抱きしめてくる。

「お前、名前は？ 年は？ 何処の学校に行つてる？」

「名前は橘光花。 年は十六。 第三高校に行つてた」

「行つてた？ 行つてたつてお前…こないだ制服着てたじゃねえか」

お兄さんはそんなに驚いたのか、やっと私を放してくれた。

「あれは仕方なかったの。だって、着替えられる状況じゃなかったんだもん」

『着替えられる状況じゃなかったって…』と、お兄さんは呟くと黙ってしまつて、私はいつかのようにじつとお兄さんの顔を見ていた。昨日はよく分からなかったけれど、お兄さんは綺麗な顔立ちをしていた。その人の心の汚れは顔に出ると言うから、この黒服のお兄さんはきつと綺麗な心の人なんだろうなと思う。

その通りに、お兄さんは名前も知らなかったような私に優しくしてくれるような人だった。

お兄さんは高そうな腕時計を確認してから、私の目を見た。

「あと三時間ここで俺を待つてられるか？」

多分、あと三時間経てば、お兄さんは仕事が終わるんだろう。

私が何でそれを待つていなくちゃいけないんだろう？

「とりあえず、家来い。どうせ一日いるならこんな寒いところじゃなく、暖かいほうがお前もいいだろう？」

寒いよりも暖かいほうがいい。

…でも。

「それって誰かの迷惑になる？ 誰か困らない？ 怒らない？」
黒服のお兄さんは、私がそう言うのを分かっていたように、少し微笑みながら首を横に振った。

「…じゃあ、待ってる。ここで待ってる」

カズには甘えることは出来なかったのに、お兄さんには素直に甘えられる。

これが大人の力なのかな？

「ねえ、お兄さんの名前は？ 何て名前なの？」

「俺は後藤田裕康（ごとうだ ひろやす）。ヒロとかヤスとか好きに呼んで構わないから、ミツ」

ミツ。

今までカズしか呼んだことのない呼び名で、ヒロも私を呼んでくれた。

ヒロの声で呼ばれると、胸がほっこりする。

「じゃあ、大人しく待ってるよ」

ヒロはそう言つと、《MIRAGE》と書かれた袋を指定された場所へ投げ捨てて、戻って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4540p/>

蜃気楼と陽炎

2010年12月19日00時05分発行